

研究課題	学習や諸活動に主体的に取り組む生徒の育成
副題	～ ICT を活用して、キャリア教育の実践を「ふるさと島守」の地域活性化と結びつける研究～
キーワード	地域学習 思考力・判断力・表現力 ICT活用 主体性 教科横断
学校/団体名	八戸市立島守中学校
所在地	〒 031-0202 青森県八戸市南郷大字島守字馬場 3 7 番地
ホームページ	simamr_j@hec.hachinohe.ed.jp

1. 研究の背景

本校は全校生徒 24 名の小規模校である。地域における学校の存在は大きく、子供が取り組む活動については、保護者、地域とも温かく見守ってくださる様子が強く感じられる。盆地の中にある自然豊かな地域であるが、少子高齢化が著しい地区でもある。生徒数が年々減少する一方、本校では数年前から総合的な学習の時間を要として、地域活性化と町おこしをテーマにした学習に取り組んでいる。本校の教育目標は数年前から「主体性の育成」を掲げており、今年度は「より主体性を高める」となっている。職員がチーム一丸となって目標達成のために日々生徒の学習活動の支援に取り組んでいる。具体的な活動として、校外に土地を借りて生産から販売までの農業活動や地域活性化のために考えたイベントや跡地再活用など、専門家の方から学んだ上で自治会長や観光協会会長を招いてプレゼンテーションを行っている。

これらの活動には ICT の活用は欠かせない。生徒たちは日頃から授業等で活用しており、活用レベルは市内中学校の中でもかなり高いほうと思われる。しかし、身に着けさせたい力は主体性であり、例えば「育てた野菜をどのように広く効率よく販売するか」「よりよいプレゼンテーションをするためにはどうあればよいか」などを生徒自らが考えていく必要がある。そこでキャリア教育の実践を「ふるさと島守」の地域活性化と結びつける研究とし、ICT を活用した活動をとおして主体性を高めていくことを考えた。

2. 研究の目的

- ・学習や諸活動に主体的に取り組む生徒の育成を目指す。
- ・主体性を伸ばすため、教科との関連を図りながら道徳・総合的な学習の時間・キャリア教育の充実を目指す。(教科横断型の学習の充実)
- ・教科横断型の学習をとおして、地域に活動の発信を図りながら実践を行い、ICT 活用力とプレゼンテーション力を身につけさせることにより、生徒の主体性を高めることを目指す。
- ・自ら進んで地域の行事やイベントに参加し、地域の一員としての自覚を高める。一連の活動をビデオカメラに収め、パソコンで動画編集を行い島守中学校の活動 PR として地域に映像を公開する。

3. 研究の経過

昨年度から、1年生（現2年生）は農業体験をとおして、主体性を高めていく活動に取り組んだ。栽培体験がメインでなく、栽培した野菜を販売するために地域の方々にどのように本校の無農薬野菜（通称：すまちゅうファーム）をPRしていくか。販売場所の交渉をはじめ、売り上げを伸ばすために販売価格をどのようにするかなど、ICTを活用し、販売キャラクターのデザイン作成やPR活動用の画像作成（ポスター制作）を行った。

2年生（現3年生）は地域の農家の自宅を訪問し、農業にかける思いについて聞くインタビュー活動をとおして主体性を高めていく活動に取り組んだ。事前にプロのアナウンサーを招いて、インタビューの仕方について基礎を学び、さらに演習を繰り返し行いプロの技術を学んだ。インタビューの様子をタブレットで撮影、撮影した映像を編集してまとめた。

3年生（現高校1年）は町おこし・地域活性化をとおして、主体性を高めていく活動に取り組んだ。物産館の館長やプロの町おこし活動家のリーダーを招いて効果的なプレゼンテーションの方法について学んだ後、地区の統括自治会長や地域の観光協会会長の前で自分たちが考えたアイデアをプレゼンした。特に3年生が行う活動については、より実現可能に向かうために次の学年に引き継がれる。このサイクルを確立するために今年度からは、この町おこし・地域活性化に向けた全校で取り組む活動を「島中プロジェクトS」（Sはすまもり[しまもりはその昔、すまもりという地名であった]）として立ち上げた。助成金により、新たに動画編集に優れたデスクトップパソコンと各学年にビデオカメラを導入した。生徒たちが目的に合わせて活用できるように教員も講師を招いてタブレット研修等を受けている。

表1 令和元年度 学習や諸活動に主体的に取り組む生徒の育成 研究の経過

時期	取り組み内容	
H31 2月	地域活性化活動の実現に向けた取り組みと次年度の方向性を協議・検討 地域での発表	生徒振り返りシート 教員アンケート
4月	町おこし・地域活性化に向けた主体性を高めるキャリア教育活動を「プロジェクトS」として計画する。	生徒アンケート
R1 6月	地域学校連携協議会にて、プロジェクトSの活動計画について報告。評価について検討。	アドバイスまとめ 教員の相互評価
8～9月	研究課題に向けた取り組み①（主体性を高める活動） 地域との連携や教員のスキルを高めるための研修会	生徒感想 生徒観察の記録
10～11月	研究課題に向けた取り組み② 地域活性化に向けたアイデアについてプレゼンテーションによる発表会の実施	有識者からのアドバイス
1月	アイデアの具現化し実際に実行するための準備やICTを活用してのPR活動	生徒感想
2月	「プロジェクトS」活動記録のダイジェスト版の完成。 最終評価の検討。次年度の組織、研究内容検討。	教員の相互評価 生徒自己評価

4. 代表的な実践

(1) 『旧島守保育所を活用してのえんぶりの実現』(3年生)

平成31年1月、3年生がこつこつと取り組んできた総合的な学習の時間における活動が1つの形として実現した。地域を学ぶところから、活性化に向けて取り組むを始めて2年半。生徒たちが旧島守保育所を活用して、地域の「荒谷えんぶり組」とのコラボレーションをしながら、地域にえんぶりの披露を行った。目標の1つとして達成をすることができた。しかし、目的は生徒が主体的に学ぶ力を伸ばすことにある。活動の始めのうちは生徒たちは何でも教師に聞くところから始まったが、ICTの活用大切さ、自分からコミュニケーションをとっていくことの大切さをじっくりと伝えていくと、気がつけば自分たちで必要なことを調べ、話し合いながら活動を進めるようになっていた。プレゼンテーションのコンセプトによってはより効果的・効率的に相手に考えや思いを伝えることができることを理解し、生徒同士で発表することでプレゼン力を高めていく様子が見られた。



自治会長、観光協会会長さんを招いて、町おこしについてプレゼンを行っている様子。

企画、運営、実行までを生徒たちで決めながら進めた結果、町おこしプロジェクトの夢の1つが実現した瞬間でもあった。



このような学習の取組から、生徒たち自らが、判断しながら主体的に取り組むことについては、教師側も納得いくレベルまで達したとの評価が学校評価アンケートからの数字で明らかとなった。4月からの活動については

1年生～3年生の総合的な学習の時間にさらなる継続性や学年の壁を越えた活動を踏まえ、新活動テーマを「島中プロジェクトS」として再スタートを切った。新活動テーマの具体的な新たな取組として、さらなるICT活用の充実(タブレット、ドローン、動画編集用パソコン)を図りながら、主体的に学習や諸活動に取り組むように活動計画を作成した。

(2) 「島中プロジェクトS」としての教員と各学年の実践

すべての教科にて、タブレットの活用を取り入れた授業を行い、授業の効率化・定着の深化

を図るように全ての教員が工夫をしながら実践を行っている。日常的に生徒がタブレットを使用することにより、ICTを活用する能力を着実に身に付けている。



図 1



図 2



図 3

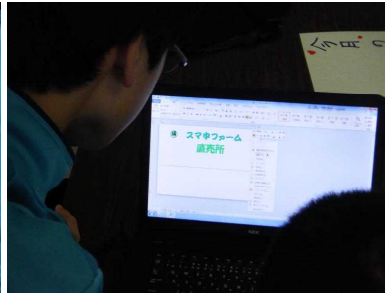


図 4



図 5



図 6



図 7



図 8

高めるために、企業から講師を招いて研修を行った。図2は校内研修にてタブレット活用の授業公開を行い、研究協議にて利点と課題点の検証を行った。

図3と図4は今年度の総合的な学習の時間については1、2年生の活動は一部学習内容を共有しながら進めている。育てた野菜を地域の方々に広く販売するための構想やパッケージのデザインをICTを活用しながら取り組んだ。

図5と図6は物産館館長と町おこしアーティストを招いてプレゼンを行っている様子である。人的・予算を踏まえ実現が可能であるか。何よりも自分たちが幸せと感じ継続できるものであるか等、様々な視点からアドバイスをいただいた。

図7は本研究助成金で購入したパソコンである。動画編集用に特化した機能をもっており、3年生を中心にスムーズに使いこなしている。驚いたことに使い方をほとんど説明しなくても直感的に操作を覚えていく生徒が多く見られた。これも今までの取組の成果ではないかと考えられる。

図8は修学旅行を活用し、東京都のあおもり北彩館にて、生徒が自ら企画した「島守銘菓の販売」と地域の重要無形民族文化財「えんぶり」を披露しながら島守のPR活動を行った。この様子はビデオカメラで収められ帰校後、パソコンにて動画編集を行った。後にプレゼンテーション資料となるため、自分たちで構想考えながら真剣に取り組む様子が見られた。このように各教科との横断的な学習を繰り返しながら、「島中プロジェクトS」の名のもとに5月から2月までの実践を行った。

5. 研究の成果

学校評価アンケート実施結果より、学校目標「目標達成を目指して学習や諸活動に主体的に取り組む生徒の育成」の取組6項目【①話し合い活動②具体的な目標を持つ③実現可能な計画の作成④授業に主体的に取り組む⑤諸活動に主体的に取り組む⑥家庭学習に主体的に取り組む】について「生徒が意識しながら取り組んでいる」は次の表1に挙げる結果となった。

表1 取組項目①～⑥の「意識しながら取り組んでいる（生徒）」の平均値

平成31年度	2月の結果	76.8%	平均値はいずれも高い水準を維持しているが、令和1年度6月の結果に比べ12月はポイントを下としてしている。⑥の家庭学習が大きくポイントと落としたことが要因である。
令和1年度	6月の結果	80.6%	
令和1年度	12月の結果	77.8%	

そして、生徒の①～⑥の取組による主体性がICT活用によりどのように変容したかは、評価規準表を参照しながら、生徒と教員からの感想・意見や映像記録、観察記録等をまとめた結果、次のとおりとなった。

- ・地域と連携しての活動や文化祭において与えられた情報をパソコンやタブレットを活用し整理、分析を行った。その結果、各生徒の活動がよりきめ細かくなり、自ら進んで取り組むことが多くなった。(全学年)
- ・出された課題をまとめること、表現することを自ら考え工夫して取り組めるようになってきた。(全学年)
- ・多種のICT機器を使用して画像や動画の効果的な活用ができるようになった。(3年)
- ・2学期後半、各活動において自ら考え、進んで取り組む姿勢が大きく向上した。(2年)
- ・地域における中学生の挨拶がすばらしい。(保護者、地域学校連携協議会)
- ・3、2学年のプレゼンテーション力の向上と他者に自分の考えを伝える力が向上した。
- ・各教科の授業において教員が今まで以上に積極的にタブレット等を活用し、授業の効率化や学習の定着をより高める取り組みが見られるようになった。(全教員からの感想)

これらのまとめの結果より、本研究の実践によって研究課題に対して一定の成果と効果が見られたと言える。中学生が地域に向けて発信している内容が徐々に広がりつつあることが自信につながるとともに、特に今年は地域イベントの出演や市が制作している地域PR映画出演など、主体性を高めるための多くの活動依頼が訪れたことが功を奏したのではないかとと思われる。



図9 地域PR映画撮影の様子



図10 地域イベントでの活動

6. 今後の課題・展望

ICTを利用して地域活性化のための活動をとおして生徒の様子を観察していると、時間を重ねるごとに効果や効率が高まっていることが、教職員からの話や生徒の表情で分かる。研究にかかる評価のアンケートの実施もありなのだから、職員のほとんどが一定の成果を感じていることから、研究としての成果は出ていると判断できる。成果については「5. 研究の成果」でも記述をしたが、この2年間、ICTを活用してキャリア教育の実践を行った結果、学習や諸活動に粘り強く取り組む姿勢が明らかに向上している。生徒たちにはあまり実感がないようだが、言い方を代えれば醸成しながら生徒たちの力になったと言える。もちろんいいことだけではない。本校の生徒の人数は今後減少の一步をたどる。職員数の減少も避けられない。限られた時間と人数の中でICTを要とした研究であったが、人とのコミュニケーションを減らしてICTに頼りすぎてもどこかで必ず限界がくると考える。

今後の展望として、小学校との連携を図りながら進めていきたいと考えている。昨年のジョイントスクールでは、今後の取組の見通しをもつために小中の教員が一緒になり、総合的な学習の時間の小中7年間の実践表〔表2〕を作成した。

表 2

学年	1年生(生活)	2年生(生活)	3年生	4年生	5年生	6年生	1年生	2年生	3年生
①総合的な学習の時間のテーマ 実施した内容	生活の授業で実施した内容を記入 ・学校たんけん ・わたしのあそび ・きせつのおそび ・かざりのしごと ・かざりのしごと	生活の授業で実施した内容を記入 ・町たんけん ・野菜を育てよう ・生き物を育てよう ・自分のものがたりをつくらう	もつと知ろうわたしたちのなんごう ・めざせ、そば博士	・島守米ができるまで	・島守米ができるまで	・使ったエコな生活	・地域に学ぶ	・これからの自分を考える	・社会の一員として地域の未来を考える
②実施した成果 児童・生徒が育ったと思われる面や向上したスキル等	・島守の先生方や2～6年生はやがて育つふれあうことができた。 ・季節によって身近な植物や生き物がちがう。またそれだけで遊んだり、ふれあうことができた。	・「自分のものがたり」を作ることによって、自分の成長に気づき、家族への感謝の気持ちをもつことができた。 ・地域のお店、施設を見学することで地域の良さ、あたたかさを知ることができた。	・そばの粉ひき(本職)やそば作りを通して、先人の苦労や知恵を知ることができた。 ・地域の方や保護者と共に活動する気持ちを持ち地域と関わろうとする意識が高まった。	・身の周りの自然、地域とかかわり島守に対する関心が高まった。	・田植え、水管理、草刈りなどの手伝い(保護者)を集めるのが大変。 ・時間の確保が大変	・島守の魅力を発表し、頑張りをしている人の苦労や努力を知ることができた。 ・四十八社巡りを通して島守の文化を再認識することができた。	・図書室で調査する力、パワーポイントを用いたまとめをする力 ・島守で働き抜く産産を体験できた。 ・一人で事業所に行き働くことで自立心が少し育った。	・働くことについて収入以外にも大切なことを学ぶことができた。 ・産産のこれからを本気で考える力、郷土愛 ・産産(こんにちには知事です)	・人前で発表する力、プレゼン力 ・コミュニケーション能力 ・産産のこれからを本気で考える力、郷土愛 ・産産(こんにちには知事です)
③探究の過程において課題と思われる点 人的・予算・時間について等	・学校に生き物がいないため、借りて行わなければならないかった。(飼育家員がいないかも) ・畑のおおを作るのに子供たちと担任だけでは困った。	・畑の管理	・田植え、水管理、草刈りなどの手伝い(保護者)を集めるのが大変。 ・時間の確保が大変				島守地区にある事業所が少ない ↓ 実情を知るためにも島守の職場に行くべきである。	空家の状況が得ることができなかった。 できれば企画した内容を実施させたかった(SNS)	
確認事項	①は直接記入(この時間に確実にうめてください) ②は青色の付箋に記入し、それぞれの枠内に貼る ③は黄色の付箋に記入し、それぞれの枠内に貼る 今回のワークショップはこの表を完成させることが目的です。この表をもとにして2回目のJSで縦と横のつながりを強化していくための話し合いをしたいと考えています。 ※ 気軽に話し合い、楽しみながら進めてください。 この時間に完成しなかった場合は1学期中の完成を目指してください				探究の過程 a 課題の設定 b 情報の収集 c 整理・分析 d まとめ・表現		H30 中学校では「町おし、町の活性化」をテーマに1学年は農産産を軸にした活動、2学年は地域の人たちと関わろうという活動と実施、3学年は地域活性化のため立案し、実際にアクションをする取組をしている。小学校でもかなり地域に関わる内容に取り組んでいる。今年度は小中間で情報を交換できたことは大きな成果であった。今年度の取組を小中共にプレゼン発表することができれば産産的な連携を高められるのではないかと		

7. おわりに

本研究によって劇的に変化したのは職員であった。研究の目標を達成するため、最初に情報化の推進体制を整えた。次第に職員の研修に対する意欲が高まり、教員の資質向上につながる結果となった。生徒の主体性を育成するためには、生徒より先に職員の主体性を高めていくことが重要であることがこの研究をとおして強く感じた。地域の方々の力を借りながら、実践を重ね生徒と職員ともに力を伸ばすことができた大変貴重な研究となった。

8. 参考文献

- ・ 国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業 (2019) 『研究協議会資料⑦』